田村志津枝さん コラム

PICK UP MOVIE

『枯れ葉』

[2023年／フィンランド・ドイツ／フィンランド語／81分]
監督・脚本：アキ・カウリスマキ
撮影：ティモ・サルミネン
出演：アルマ・ポウスティ、ユッシ・ヴァタネン、
ヤンネ・フーティアイネン、ヌップ・コイヴ

© Sputnik / Photo: Malla Hukkanen

厳しい現実のなか
はぐくまれる愛

この静かで控えめな愛の物語が、なぜ多くの人の心に沁みるのだろうか。

まぶしい照明、溢れかえる色鮮やかな食品の数々。そんなスーパーの売り場から映画は始まる。そこで働くのが主人公の女性アンサだ。しかし職場を一歩出れば、彼女の生活の場はほとんどが薄暗がりだ。寂しい路面電車に揺られ暗い夜道を帰るのだ。

粉塵にまみれ、けたたましい騒音を耳栓で防いで働いているのは、主人公の男性ホラッパだ。彼の宿舎は工場わきの粗末なコンテナハウス。ベッドで所在無げな彼を同僚が無理矢理カラオケに誘い出す。そこでアンサとホラッパは出会った。とはいえ、たがいに遠慮がちに視線を交わしただけで、一言も喋らず、名前さえ知らないまま別れてしまった。

二人は共に、不安定な下積みの労働者だ。理不尽な理由で辞めさせられれば、次の職を探すだけのこと。またいつ首を切られるかも知れぬ危険な仕事に就く。日々働いて自室に戻れば、しょっちゅう耳にするのは旧型のラジオから流れる、ウクライナへのロシア軍侵攻のニュースだ。このニュースでこれが現在の物語だと分かるが、なぜか作品全体の雰囲気は一時代前に近い。

旧いラジオやジュークボックス、ずっと前に流行った歌、そして古びた映画館。これらをなぜ監督があえて背景に取り込んだかは、さまざまな推測ができる。時代に取り残されたような風景のなかで二人は会えたり会えなかったりを繰り返す。彼らが住むフィンランドのヘルシンキはIT先進国の首都なわけだが、そんな華やかさとは無縁な暮らしのなかで物語は進行する。セリフはギリギリまで切り詰められ、動作は抑制され、顔も無表情に近く、変わりばえしない日常がつづられる。

けれど、短い一言や、ごく日常的な立ち居振る舞いが、この寡黙な二人の心情を的確に伝えてくる。演技せずに存在感を出す見事な演出だ。画面作りも緻密で、ありふれた暗い街路、あるいは質素な部屋のたたずまいが、彼らを取り巻く状況を浮び上がらせる。

言葉に頼らずシンプルなカットをつないですべてを語る方法は、まさに映画の原点だ。その真っ直ぐで深みのある表現が、物語の内容と相まって私たちを虚心にさせてくれる。豊富なキャリアの積み重ねの上にカウリスマキ監督が到達した境地なのだろう。

そしてこの物語には、気づかぬほど地味な優しさが散りばめられている。主人公らのさりげない所作に凛とした自己主張が光る。硬派な社会派でもあるカウリスマキ監督の繊細な一面が発揮された品格のある作品だ。

プロフィール
田村志津枝：ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた　1977 年にファスビンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983年からホウシャオシェンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。